産土

彦島八幡宮社報
第46号

『則天去私の心で、神喜地喜人喜で暮らせますように』

宮司　柴田　宜夫

平成二十六年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

年頭の言葉を「則天去私（そくてんきょし）　神喜地喜人喜（じんきちきじんき）」としたためました。　則天去私とは、夏目漱石が残した言葉で、人としての本来の姿を意味します。目には見えないけれど、大切なかけがえのない大自然に身をゆだね、私利私欲をかなぐり捨てて生きていくことです。まさに、雨奇晴好（うきせいこう）、降るもよし晴れるもよしという、とらわれない心で、何事も対処していくということですね。　英語では、「アクト　ナチュラリィ」、自然にふるまうということでしょうか。　なかなか容易にはできないことでです。　しかし、相田みつをの詩にも、「雨の時には雨の中を風の日には風の中を」と書かれています。　内憂外患（ないゆうがいかん）の世相であればこそ、則天去私の心を生活の心掛けにしたいものです。

「神喜地喜人喜」、これは、私の造語（ぞうご）であります。　私の御奉仕の指針、モットーで、神様を喜ばす心で地域の人々も笑み栄える社会であってほしいと願いつつ、鳥居の内の祭典行事は言うまでもなく、鳥居の外の地域社会へも微力ながら尽力するという神様とのお誓いであります。

本年の干支（えと）は十干十二支（じっかんじゅうにし）の十干の第一に当たり、「甲午（きのえうま）」の年であります。　五行（ごぎょう）では、木のお兄さんということで大樹、大木でもあります。　動物では、馬があてられています。　この「甲」には、「最もすぐれたもの」という意味があり、さらに、「午」には、「つきあたる」、「さからう」という意味があります。　行く手をはばむものに、つきあたっても、さからい、天馬のごとくかけあがって、もっともすぐれた年、豊かで明るい社会であってほしいと願うものであります。

そのためにも、神様が、お喜びになられる心、「則天去私」の心で、地域もそこに暮らす人々も喜び笑み栄え、運命共同体としての地域社会になりますように、つとめてまいらねばと思いを新たにしています。

本年も大神様の御加護によりまして、幸多く、さらにご繁栄ご隆昌であります ことを心からお祈りもうし上げまして新年の御挨拶と致します。

宮司プレス総集編

※平成25年下半期（6月～11月）発行分を総集編としてお届けします。掲載紙面の都合上、中略しています。全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第八十五号（平成二十五年六月三十日）

◇宮司の柴田です。

宮司に就任して、一年の歳月が流れた平成十八年六月より、毎月発行を続けている「彦島八幡宮　宮司ニュース　宮司プレス」、先月号で丸七年、今月号で八十五号、月日に入ります。　しかしながら、今年になって、発行日が、大幅に遅れ、月末になってしまうという事態（じたい）が、茶飯事（さはんじ）となり、改善されないまま、ワースト記録を更新中であります。

梅雨の季節ですよね。　どうしても、雨が降り続くと、「じめじめしている」とか「うっとうしい」とかですね、この梅雨を邪魔者（じゃまもの）扱いにしてしまいますよね。

◇毎朝つかっている私の濃い青のマグカップには、「雨の日には雨の中を風の日には風の中を」と白の染料（せんりょう）で、相田みつを さんの詩が焼きつけてあります。　雨が降るからうっとうしい、風が強いから嫌だというのは、自分のわがままな気持ちなのですね。　「雨奇晴好（うきせいこう）」という、降るもよし晴れるもよしというとらわれない心持ちで、何事にも対処（たいしょ）することの大切さを説いています。　実は、梅雨は邪魔者どころか、わが国にとって大歓迎すべきものなのです。　この梅雨によって田植えができ、稲作が可能になります。　梅雨に加えて九月上旬の台風による雨は、現代でこそ自然エネルギーのうち、比重は少なくなりましたが、水力発電の源にもなります。　この水力発電が盛んであったのは、世界有数の森林を有し、それが保水（ほすい）し、多くの川の流れを作りだしていたからなのです。　しかし、すべてが便利になった現代社会のなかで、そういう自然の営みや日本列島の位置と雨との関係を忘れてしまいますと、「うっとうしい、じめじめする」と邪魔者扱いにしてしまうのですね。　本来ならば、梅雨こそ恵みの雨であり、感謝しなければならないのです。

◇さて、本日の夕刻、大祓式（おおはらいしき）を斎行（さいこう）します。　人形（ひとがた）に自分の罪（つみ）穢（けが）れを移して、茅（かや）と蓬（よもぎ）で奉製（ほうせい）した茅（ち）の輪（わ）を「蘇民将来（そみんしょうらい）」と唱え三回くぐり抜けます。　では、罪穢（つみけが）れとは何でしょうか。　罪は、我儘（わがまま）、私利私欲（しりしよく）です。　梅雨を邪魔者扱いする一人よがりのわがままな気持ちを排除し、感謝する心を取り戻すことが、罪を祓（はら）うことですね。　「私」という漢字は、「禾」に「厶」ですよね、「禾」は、穀物のことで、「厶」は、肘鉄（ひじてつ）ですね。　大事な共同体の穀物を肘鉄（ひじてつ）で独り占めにしているのが、「私」という字です。　やはり、肘鉄で独り占めにせず、両手をひろげて分け合おうと、「厶」に「ハ」をつけると、「公」という漢字になりますよね。　罪を祓うと運命共同体になるわけです。　穢れは、病（やまい）でありまして、神様から授かった元気な体が枯（か）れる、「気枯れ」ですね。　「気」という漢字は、「气」のなかに、実は、「米」が入りますよね、ですから、「氣」です。　やはり、日本人のエネルギーの源は、「お米」なのですね。　穢れを祓うことは、お米が出来上がるまでの過程、プロセスに深く思いをよせて、感謝することだと考えますね。　そして、罪穢れが払われた時に、大自然への感謝、ひいては畏怖（いふ）と尊敬という、日本列島の四季をつらぬく心構え、初心を取り戻すことができるのではないでしょうか。　その心構えと初心こそが、神様から授かった美しい心と身体なのですね。

◇吉田松陰（よしだ　しょういん）先生は、「心正直（こころしょうじき）身清浄（みせいじょう）」と仰（おっしゃ）いました。　私利私欲をかなぐり捨て、心正直に、気持ちを枯らさず、身清浄にする、これこそが、本日の大祓式であります。

◇来月、私は、一つ年を重ねて満五十一歳を迎えますし、宮司に就任して丸八年となります。　加齢（かれい）に抗（あらがう）、「アンチ　エイジング」ではなく、よりよく年を重ねる「ウェール　エイジング」で、生活の質の向上を心掛け、御奉仕申し上げたいと思います。　なにとぞ、宜しくお導きください。

御自愛を心からお祈り申し上げます。

第八十六号（平成二十五年七月三十一日）

◇宮司の柴田です。

過日の十四日より、まとまった雨が降らず、暑さ一入（ひとしお）厳しき昨今です。　蝉の大合唱に混じって、「季節はずれ」の「ウグイス」の鳴き声も境内に響き渡っていました。　「ウグイス」の産卵が遅れると、八月上旬まで鳴くのだそうで、特別変異（とくべつへんい）ではないのですけれども、これも、ついつい、異常気象と思ってしまうような、うだるような暑さの日々です。　一日で一月分の降雨を観測するという、記録的な豪雨に見舞われた山口市や萩市では、ライフライン、交通網も寸断されるという甚大な被害がもたらされました。　被災されました方々に、お見舞いを申し上げますと共に一日も早い復興を願うものです。

◇この「ゲリラ豪雨」ともいうべき原因は、都市部のヒートアイランド現象など諸説あるようですが、根っこにあるのは、地球温暖化という声が多いようです。　温暖化ガスが増えて、地球全体が暖められるなかで、極端な暑さ、寒さや大雨などに見舞われやすくなっていると科学者たちは、異口同音（いくどうおん）に仰（おっしゃ）います。　尊い命を落とされる方や行方がわからなくなる方もでるほどの豪雨の一方で、極端な少雨で取水制限や断水が出る地域もあり、この二極化、どうしてこのようなことになるのでしょう。　吉田兼好（よしだ　けんこう）のしるした徒然草（つれづれぐさ）には、「四季は定まれる序（ついで）あり死期（しご）は序を待たず」とありますが、人間の命ほど定めがないものはなくて、「老いたると若きとにかかわらず、定めがたきものは死期なり」ともしるされていて、その人の命とは裏腹（うらはら）に、日本の四季は、折り目正しいと強調されているのですね。　その日本の四季の真夏の前に必ず、梅雨があって、まとまった雨が広い地域に降るからこそ、乾いた田を滔々（とうとう）とした水を湛（たた）えた美田（びでん）にかえることができたのです。　そして、たわわに実った稲が、頭（こうべ）をたらし、黄金色に輝いて、その恵みをいただいて、日々是好日にちにちこれこうじつ、毎日が穏やかで良い日」が続いてきたのではないでしょうか。　お米一升で、六四、八九七粒」あるそうです。（八ッヤク十一と覚えました！）　一体、われわれは、どれだけのお米の粒で、生きながらえているのでしょうか。　われわれの命の奇跡に、「畏敬（いけい）」「感謝」の言葉しか見当たりませんよね。

◇東京大学大気海洋研究所の木本雅秀教授は、「統計的に裏付けられてはいないが、地球温暖化が進むと、降る場所と降らない場所の差は大きくなるといわれている」と話されています。気温が上がれば空気が含むことのできる水蒸気が増える一方で、ある気象条件のもとで雨が降ることができる場所は限られているので、一度に降る量が増えるのだそうです。　さらに、その強い雨が、周辺での降雨を抑えることにもなるそうです。　これが、甚大なる被害をもたらした「ゲリラ豪雨」の要因なのであります。　地球環境をふくめ、日本の気象の変化も、思いのほか深刻なようです。　先人たちは、危機に見舞われた時、どのように対応したのでしょうか。　氷河期が終わったとされる約一万二千年前は、水が解けたことによって、海流の循環が変化し、暖かくなる前にいったん寒冷化が進み食糧不足となったそうです。　文化人類学者の竹村真一先生は、「そこで人類が創造したのが農耕だった」と仰（おっしゃ）っています。　ピンチの時に、自給自足という「フロー」社会から、たくわえるという「ストック」社会に変革するという離れ業をあみだしたのです。　これから、温暖化ガス削減の国際的な仕組みや、異常な気象から人命と安全を守る社会インフラづくりにですね、「知恵」を絞り、先人たちに見習ってでですね、乗り越えていかなければならないのですね。

◇天照大御神（あまてらすおおみかみ）、「伊勢の神宮の内宮（ないくう）にまつられていますが、お孫さんにあたる瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）に託されたのが、「稲穂（いなほ）」であります。　日本書紀（にほんしょき）に書かれている、「三大神勅（さんだいしんちょく）」といわれるひとつで、「斎庭（ゆにわ）の稲穂（いなほ）の神勅」であります。　天照大御神が、「私が高天原（たかまのはら）で作る神聖な田の稲穂をわが子に授けよう」と託されたのですが、単なる稲穂ではなくて、天皇陛下の御即位で一番重大な儀式である「大嘗祭（だいじょうさい）」にお供えをされた稲穂なのです。　毎年十一月に行われる新嘗祭（にいなめさい）をはじめとして、四季折々の祭典は、まさに、その特別な意味を持つ尊い稲穂に感謝をささげ、その神勅（しんちょく）にゆだねられた天照大御神の大御心（おおみこころ）に添うべくお祭りを行い、さらには、今日までかわることなく継承されてきた精神を次代に継承するということなのですね。　「倉庫令（そうこれい）」という古い法律には、「米は二十年たくわえよ」と定められていてですね、その米の貯蔵倉庫ともいうべき、高温多湿（こうおんたしつ）の日本に気候条件にそくした、「高床式（たかゆかしき）」のお建物に、天照大御神はお鎮まりになっていらっしゃいます。　そして、倉庫令の定めのとおり、二十年に一度お建て替えでありまして、天武天皇がお定めになり、持統天皇が始められた第六十二回の式年遷宮、いよいよ今秋です。　すでに、「お白石持ち行事」も始まりました。　日本の「ストック社会」の原点は、神宮さんなのですね。　◇過日、私は五十一歳を迎えました。　日本人の「神社信仰」の三本柱は、「稲と家と御先祖様」と考えます。　その三本柱を次世代に継承する「防人（さきもり）」としての、その与えられた使命、天命をを粛々（しゅくしゅく）と果たしていかねばと決意を新たにしています。　御自愛をお祈り申し上げます。

第八十七号（平成二十五年八月三十一日）

◇宮司の柴田です。

発行日のワースト記録を塗り替えつつ、とうとう茶飯事（さはんじ）の月末となってしまいました。　宮司プレスの発行に限っては、私の「ルーティーン（決まりきった手順）」になりつつありまして、猛省（もうせい）せねばと思います。　既（すで）に発行した「宮司プレス」の閲覧（えつらん）コーナーを、お宮の西回廊（にしかいろう）休憩所の入り口に設けていました。　そのコーナーにおいでになり、今月号の発行を確認する方もおられ、「早く編集しなきゃ」というプレッシャーを感じながら、今日の日を迎えています。　みなさん、お待たせしました。　第八十七号の発行の運びとなりました。　「愛する」の反対語は、何だとお考えですか。「憎しみ」でしょうか、いいえ、そうではありません、実は、「無関心」なのです。　PTAの活動を長くさせて頂きますと、理不尽なクレームや無理難題を述べられると、その瞬間はとても嫌な思いをしますが、意志をお示しになっていらっしゃるのでありまして、最大の敵は、全く関心をお示しにならない方々なのです。　そうしますと、「宮司プレスも、少なからず愛されているのでありまして、心から感謝申し上げながら、続けていかなくてはと決意も新たにしています。　ただし、発行日を早める努力も肝要（かんよう）ではありますが。　ルーズベルト大統領は、「最初に月を目指せ。　なぜならば、たとえ取り損（そこ）ねても、そこから、星を目指すことができる。」と仰（おっしゃ）いました。　当面の「星」である大目標の「第百号発行」も見えてはきましたが、「月」である小目標の「第八十八号発行」、せめて、朝粥会までの発行を目指したいと思います。

◇過日、懇意にしている漁師さんから、見たこともない魚が網にかかり、下関水族館に届け、南方の海に生息する魚だと判明したという話を聞かされました。　身近にも、異常な暑さゆえの出来事を目の当たりにするようになりましたね。　「平均気温」と「日照時間」、さらに、「最高気温」の記録を更新し、「記録的猛暑」といわれた八月も、終わりを迎えました。　朝明けの境内は、ひんやりとして心地よく、ようやく秋の気配を感じています。

◇「初老（しょろう）」という言葉、ご存じでしたか。　老境（ろうきょう）に入りかけた年ごろのことで、もともとは四十歳の異称のことなのだそうです。　論語に、「吾（われ）二十有五（じゅうご）にして学びに志し、三十にして立つ。　四十にして惑わず、五十にして天命を知る」とあります。　確かに人生五十年の時代には、「四十にして惑わず」の年回りになれば、老いを意識したでしょう。　生活が便利になり食生活も格段に向上し、抗加齢（こうかれい）、アンチエイジングがもてはやされる昨今、見た目も気持ちも若い、いわゆる「アラフォー」世代の男女、「初老」のもともとの意味と、あまりにもかけ離れ、別世界ですよね。　それでは、現在の初老の年代はといいますと、NHK放送文化研究所の調査によりますと、男性五十五～五歳、女子五十八～四歳だそうです。　ちなみに、私は五十一歳なので、「初老」に入らないようですね。　宮司を兼ねている八連島八幡宮では、数え四十一歳を迎えたお正月に、「初老の祝」をする習わしがあります。　八幡宮に参拝し、厄除（やくよ）けの祈願祭の御神楽（おかぐら）を奉納し、自宅にて家族や親戚一同を招き宴（うたげ）を催（もよお）すという行事です。　「初老」という言葉とその本当の意味、大事に伝えていただいたらいかがでしょうか。　総務省の発表によれば、初老より年長の六十五歳以上の「老年人口」が今年三月末時点で三千万人を超え、さらに、驚くべきことに、十五歳から六十四歳までの「生産年齢人口」、つまり世の中の働き手の数は、八千万人を割り込んだそうです。　年金を受ける高齢者が急増しているのに、それを支える労働力は減るばかり、少子高齢社会のすさまじさを物語る数字でもあるし、日本の危機的状況化の深刻さでもあります。

◇竹には、「六十二の節目があるそうですが、しかも、「竹の子」のころからあるそうなのです。　人生にも様々な節目がありますが、日本の国も大きな節目を迎えています。　来月は、伊勢の神宮さんでは、いよいよ「式年遷宮（しきねんせんぐう）」のクライマックスともいうべき「遷御（せんぎょ）」が行われます。　御遷宮（ごせんぐう）の大義、重要で大切な意義というのは、「常若（とこわか）」であります。　「常若」とは、常にみずみずしく清々しい、生命力あふれる状態を尊（とうと）ぶ、わが国の伝統的な考え方、心であります。　二十年の一度のお建て替えの遷宮によって、神宮の神様の神威（しんい）、威光（いこう）威力（いりょく）、つまりは、お力が、永遠に若返るのであります。　そして、二十年前の第十一代垂仁（すいにん）天皇の皇女（こうじょ）である倭姫命（やまとひめのみこと）の御巡幸（ごじゅんこう）による伊勢鎮座（いせちんざ）を、二十年毎に再演するのであります。　時を超えて先人たちが宮々と伝えてきた神祭りの心と技、その感激を共有する、まさしく二千年前の原点に帰る、原点回帰（げんてんかいき）なんですね。

◇過酷災害（かこくさいがい）、シビア　アクシデント）の福島の原発をはじめ、内憂外患（ないゆうがいかん）の危機的状況化の日本ではありますが、この二十年に一度の大きな節目であればこそ、解決にむけて、良き方向へシフトし軟着陸できることを願うものです。　そのためにも、「御遷宮の心」である、「常若」という前向きな心掛け、未熟さゆえのひたむきさ、「初心に帰る」、謙虚に自分を見つめる、「原点回帰」という心構えを忘れずに過ごしたいものです。

回 第八十八号（平成二十五年十月三十一日）

◇宮司の柴田です。

八月まで、八十七か月連続で毎月発行していた宮司プレス、八十八カ月目にして、志（こころざし）なかばで、連続発行が、途絶えることとなってしまいました。九月号は休刊、お休みということで、これもひとえに私の不徳の致すところでございまして、大失敗大失態であります。「今日の事は明日に延ばすな」という格言（かくげん）がございますが、これは、私に向けられているのではないかと思いますね。「今月の事は来月に延ばすな」と言い換（か）えてですね、戒（いまし）めなければなりませんね。今号も、猛省をしながらの編集発行です。しかしながら、「成功」の反対語は、「失敗」ではありませんで、「何もしないこと」であります。したがいまして、起死回生（きしかいせい）の名誉挽回（めいよばんかい）をするためには、今月は、なんとか二回発行しなければなりません。そうすれば、毎月発行しているペースだけは、維持できるのであります。みなさまも、お待たせしました。「宮司プレス第八十八号」の発行です。

◇十月に入りましても、夏日が続き、昨日、新潟県では、十月の史上最高気温を観測したようですね。海水温が上昇したことにより、台風の発生が、すでに、昨年を上回っていますし、過日の台風二十四号では、警報も発令され緊張した夜を過ごしました。列島の天気が大荒れですよね。関東などでの竜巻の被害が相次ぎ、首都圏や名古屋、さらには京都でも局地的な豪雨をもたらしました。記録的な酷暑をもたらした気象の変調は、今もなお続いています。酷暑や竜巻、豪雨を引き起こした共通の要因は、太平洋西部や日本海の海面温度が平年よりかなり高いためだそうです。「極端気象」が現実になってきたのでしょうか。気象災害には、新たな知識と心構えで備えなければなりません。高性能レーダーを増やしたり、家屋の浸水を防ぐ地下貯水槽を建設したりというハード面の整備のみならず、情報伝達などのソフト面の対策も必要ですよね。そのハード面、ソフト面は、「公助（こうじょ）」、国や県市といった公共の援助が必要ですが、「自助（じじょ）」、自分のことは自分で守る、「助け合い」という人へ「という備えも必要です。さらに、「向こう三軒両隣」「相互扶助」「相互規制」という、運命共同体としての地域社会を産み出していく、「共助（きょうじょ）」が、とても重要になってくるのではないでしょうか。アニメ監督の引退を表明された宮崎駿監督ですが、東日本大震災の発生から間（まもない平成二十三年三月二十八日、その日は、映画「コクリコ坂から」の主題歌発表会見に登壇され、次のように述べられました。「今の一部を失いつつある事態の中で、アニメーションを作っている自覚を持っている。」言葉がときおり涙で途切れたそうです。さらに、続けられ、「私たちの島は繰り返し地震と火山と台風と津波に襲（おそ）われてきた。それでももう一度、より美しく努力をする甲斐（かい）の島。絶望する必要はない。」としめくくられました。我々が、忘れてはならない大自然の脅威（きょうい）に対する畏敬（いけい）と心構えを述べられたのではないでしょうか。

◇「わがくには　神のするなり　神まつる
　　昔のてぶり　わするなよゆめ」

これは、明治天皇様が、明治四十三年にお詠（よ）みになられた御製（ぎょせい）です。十月は、神無月（かみなづき）と言われますが、「無（な）」は、現代語の「の」という古語（ここ）でありますから、まさに、「神の月」「神まつる月」だと私は考えています。今月は、宮司を兼ねている天連島八幡宮を皮切りに、田の首八幡宮、さらには、本務である当宮の例祭と続きます。襟を正して祭祀（さいし）の厳修につとめてまいります。

◇建武（けんむ）の中興（ちゅうこう）の英主（えいしゅ）で、第九十六代後醍醐天皇（ごだいごてんのう）は、

「みな人の　こころもみがけ　千早ふる
　　神のかがみの　くもる時なく」

と詠まれています。「千早ふる」は、神にかかる枕詞（まくらことば）です。すべての人は、生まれた時には純真赤子（清き明（あか）き子）でありましたが、それが様々な生活環境によって色々の色がつきます。この色の中でも変な色はふきとり、本来の純真赤子の心を見失ってはなりません。そのために後醍醐天皇は、神の鏡が曇る時がないように、人も心を磨いて変な色にそめるな、曇らせてはならない、そのような心を持てるようつとめなさいと説いています。そのために必要なのが、神の本来の姿である「清浄（せいじょう）」と「正直」なのですね。神様に向き合う、曇りのない鏡を見るわけですから、神の心に照らして反省の念を常に持つことが、自分の心の汚れを毎日、ふきとることになるのです。つまり、心の炭酸ガスを吐きすてて、神様の元気を吸うことで神の心に近づき、その神の心で生活できるのですね。日々、月々、季節毎の「祭り」は、いわば、呼吸です。そして、この月の年毎の例大祭は、「深呼吸」なのですね。「恵み」に感謝し、神の御加護に報いることができるよう日々祈願することをお誓いし、真心こめて、全身全霊で御奉仕申し上げたいと思います。

◇過日、神宮さまの内宮さまの遷御（せんぎょ）の儀を奉拝（ほうはい）させて頂きました。静寂と浮闇（じょうあん）のなか、御正殿から出られた天照大御神様が、目の前を右から左へ数十メートルご移動になり新殿にお入りになるクライマックスという場面、感激感動のあまり、涙が頬を伝ったあの瞬間、生涯消える事のない、かけがえのないもの、センス　オブ　ワンダーであります。その御恩にも報いなければと思いを新たにしています。御自愛を祈ります。

回 第八十九号（平成二十五年十一月二十七日）

◇宮司の柴田です。

八月まで、八十七か月連続で毎月発行していた宮司プレス、八十八カ月目にして、志（こころざし）なかばで、連続発行が、途絶えることとなってしまいました。九月号は休刊、お休みさせて頂きました。しかしながら、十月に二回発行すれば、毎月一回のペースは守られる、起死回生（きしかいせい）の名誉挽回（めいよばんかい）をしなければと一念発起（いちねんほっき）しましたが、発行はおろか編集もままならず、いたずらに時だけが過ぎ、今現在、一か月遅れであります。まさしく、有言不実行（ゆうげんふじっこう）でありまして、「うどん屋の釜（かま）」でありますね。「湯（言う）ばっかり」になってしまいました。猛省をしながらの発行が続いていますが、みなさま、お待たせしました。「宮司プレス第八十九号」の発行です。

◇十月の半ばまで、残暑という言葉がふさわしいのかどうか定かではありませんが、厳しい暑さが続きました。季節の移ろいは、急ぎ足で速度を増して、秋の気配を感じる間もなく、境内の桜や楓（かえで）の葉は色づき、時折吹く木枯らしに、鮮やかな紅の葉を惜しみなく散らします。その紅の葉を散らさないと、冬は、訪れません。まさに、季節の移ろいは、「仁」と「義」で成り立っています。秋という季節が、自分を犠牲にして、紅の葉を散らし、冬の訪れをたすけるというのが、季節の移ろいですよね。自ら犠牲になる、もってうまれた宿世（しゅくせ）を全（まっ）とうする「正しき道」、それが、「義」という心です。その「正しき道」は、「極端気象（きょくたんきしょう）」によって、徒然草にも書かれている、「四季は定まれる序あり」という、正確で定まっていた季節の移ろいも、不順になってしまいましたね。

◇浮世離（うきよばな）れした、ユニークな人物で、国際的な数学者の岡潔（おか　きよし）先生は、昭和三十五年に文化勲章を受章されました。その文化勲章の親授式（しんじゅしき）の後、昭和天皇様からの「数学とはどのような学問であるか」という御下問（ごかもん）に、「数学は生命（せいめい）の燃焼（ねんしょう）によって作るのです。」と答えられたそうです。数学は、無機的（むきてき）で抽象的（ちゅうしょうてき）な世界と思われがちですが、岡先生は、「数学で大切なのは情緒であり、その情緒とは、野に咲く一輪のスミレを美しいと思う心」と述べられています。一輪の花を愛（め）でる心は、やはり、心の余裕でもあり、日常生活のちょっとした変化も見逃さない、仕事に対しても真摯（しんし）に、人との接し方も細やかになるのではないでしょうか。「仁」と「義」でなりたつ大自然の営み、あたり前のことではありますが、恐れと畏敬（いけい）、感謝の気持ちを忘れてはならないと思います。

◇江戸時代末期、幕末期の文壇（ぶんだん）において、清新（せいしん）な万葉調（まんようちょう）の歌を詠（よ）まれた歌人（かじん）の橘曙覧（たちばなのあけみ）の「たのしみは　からはじまる「独楽吟」に、

「たのしみは　朝起き出でて　昨日まで
　　なかりし花の　咲ける見るとき」と詠まれています。昨日まで咲いていなかった花が開く、そのような何でもない日常の出来事に感動する、心が揺さぶられる、その感性は、誰の心にも宿っていますが、自分自身が、その感性を大事にしなければ、磨（みが）かれないのですね。日常の小さな発見に目を向けて、そこから感動を得られるかどうか。心の持ち方で、豊かな人生になるのですね。

◇十二世紀、西暦一一八七年に宋の国で、初学者（しょがくしゃ）の課業（かぎょう）、いわゆる八歳から学ぶ者の教科書として編纂（へんさん）された「小学（しょうがく）」に、「人を責める心をもって己を責め、己を恕（じょ）する心をもって人を恕す」とあります。人を責める時の勢いで自分を責め、自分の身を大事に思うように人を思いやる、「恕（じょ）」とは、優しさ思いやりです。人は、いかに自分に対して甘く、人に対して厳しいことが多いかということでありまして、自分に厳しく他人対して寛容（かんよう）さを持ちわせることが大切です。まさに、この紅の葉を散らす「義」の心で己を律し、来るべき季節を迎える「仁」という優しさで人に接することを心掛けたいと思います。そして、どんな時にでも、「野に咲く一輪のスミレを美しく思う心」を忘れずに、物事に対処したいものです。

◇いよいよ本年も残すところ一月、整理整頓（せいりせいとん）・大掃除をしなければなりませんね。整理とは、物を減らすことで、整頓は、物を使いやすいように配置する、置き場を決めることです。片づけに失敗する人、得意でない人は、整頓から始めるのだそうです。後始末は、次なる行動へのステップですから、すぐに、心を込めて、完全にが鉄則ですね。「うどん屋の釜（かま）」、「湯（言う）ばっかり」の私が申し上げても、あまり、真意（しんい）が伝わらないと思いますが、皆様、遺漏（いろう）なく年の瀬を迎えられ、御多幸でありますようにお祈り申し上げます。

回 第九十号（平成二十五年十一月三十日）

◇宮司の柴田です。

一か月遅れの発行でありましたが、毎月一回の発行ペースに、ようやく、軌道（きどう）が修正しました。しかも、発行日の間隔（かんかく）が、僅（わず）か、三日というのもこれまでにない快挙（かいきょ）なのですね。かの有名なインドの指導者、マハトーマーガンジーさんは、「明日、死ぬつもりで生きなさい、永遠に生きるつもりで学びなさい」と諭（さと）されました。やればできるのであります。この勢いで、社報「産土」第四十六号の「巻頭言」と「神宮参拝の思ひで」の原稿も、迅速（じんそく）かつ円滑（えんかつ）に、脱稿（だっこう）させたいものであります。確証はないのですが、孔子（こうし）の編ともいわれる、「五経（ごきょう）」の一つ、中国最古の詩集である「詩経（しきょう）」に、「靡不有初　鮮克有終」とあります。読み下しますと、「初め有（あ）らざるは靡（な）し、克（よ）く終わり有（あ）るは鮮（すぐ）なし」です。「初めは誰だって頑張るが、最後までやり遂（と）げるのは容易（よういい）ではない」と訳せます。「有終（ゆうしゅう）の美（び）」という言葉は、前述（ぜんじゅつ）の「詩経」の言葉に由来（ゆらい）します。まさしく、毎月発行の宮司プレスの道のりは、この詩経の言葉そのものようですね。九十の大台（おおだい）に到達（とうたつ）し、感慨深いものがあります。当初の大目標である百号発行も、その頂きが見えてきました。明治天皇は、

「おほぞらに　そびえて見ゆる　たかねにも
　　登ればのぼる　道はありけり」

という御製（ぎょせい）を残されています。「天空（てんくう）高くそびえる高い峯（みね）で、到底（とうてい）人のなせるわざでは登ることが出来ないと思われるところでも、登ろうと志（こころざ）せば、必ずしも不可能ではない。登るべき道はあるものである。」とおっしゃっているのですね。宮司を、おつとめさせていただく限り、「有終の美」が飾られるよう、永遠に生きるつもりで学ばねばと思いを新たにしています。そのためにも、常に、謙虚に、「温故知新（おんこちしん）」、「稽古（けいこ）」の心を忘れずに過ごさねばと思います。

◇「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る」、これが、「温故知新」でありますね。「温」とは、冷えてしまったものを元に戻す、「復習、おさらい」のことですし、「故」は、「古い、昔」の意味です。古い物事を研究して新しい知識や考えを聞くことが、学問やその道に進んだ者がとるべき態度なのであります。「稽古」とは、「古（いにしえ）を稽（かんがえる）」とも読みます。千利休（せんのりきゅう）の道歌（どうか）に、「稽古とは　一より習ひ　十（とう）を知り　千（とう）よりかえるもとのその一」とあります。道歌とは、道徳や訓誡（くんかい）の意味をわかりやすく詠（よ）んだ短歌のことです。先人たちが研（みが）きに研いた道を、一、二、三四と順を追って進みながら十まで進むのが稽古であり、稽古は極まるところがなくて、その十の次には新たな成長への一が始まる、その繰り返してあるのですね。まさに、スパイラルな成長、螺旋（らせん）階段のように上へ上へと登りつめていくわけです。

◇今年は、天つ神のトップである、伊勢神宮の二十年に一回の第六十二回式年遷宮、さらに、国つ神の代表ともいうべき出雲大社では、六十年に一回の大遷宮が、重なって行われるという佳節（かせつ）でありました。しかも、東日本大震災復興のさなかに、厳粛（げんしゅく）に古式（こしき）のままに斎行されたことに、大きな意義があると思います。千利休が詠んだ「十よりかえる　もとのその一」が、本年であったわけですね。

◇日本経済・社会六十年サイクル説なるものがあるそうです。それによりますと、昭和二十年から平成十七年までの六十年間を十五年のスパン（時間の幅のことです）で区切るのだそうです。最初の十五年、昭和二十年～三十五年が政治改革期、自民党が結党しました。

◇次に、昭和三十五年から昭和五十年が経済発展期、東京オリンピック、大阪万博が開かれました。さらに、昭和五十年から平成二年が文化の時代、花博が開催されました。そして、平成二年から平成十七年、混乱期、バブル崩壊、デフレ、自民党退潮（たいちょう）と区切られるそうです。今は、政治の改革期に当たり、次の経済発展期のちょうど中間なんだそうです。その次の起点になるのが、東京オリンピックの開催される平成三十二年、西暦二千二十年です。その東京オリンピックが終わりますと、次の遷宮にむけての諸行事や奉賛活動も始まります。まさに、日本の国、さらに次の遷宮に向けてもこれから、正念場でもあります。

◇遷宮の翌年は、「おかげ年」といわれています。出雲大社の大遷宮の翌年でもあるので、私は、「大おかげ年」だと考えています。いま、ここに生かされていることを神様に感謝する、感謝の心をつないでいくこと、それこそが神道の本質であり、「おかげさま」という謙虚な心につながるのではないでしょうか。「大おかげ年」になりますよう努力したいと思います。御自愛をお祈り申し上げます。

社務日誌抄

（本宮祭典厳修報告）
―平成二十五年七月～十二月―

▼文　月（七月）

二十九日　**夏越祭前夜祭・菅抜神事**

＊当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅ノ輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる古式。罪・穢れを祓い清めました。

三十日　**夏越祭御神幸祭**

＊御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域を中心に陸上海上を隈なく御神幸しました。海上御渡は西日本有数の郷土神事です。

▼葉　月（八月）

十一～十六日　**神道家中元祭斎行**

＊上元（一月十五日）中元（七月十五日）下元（十月十五日）を先祖供養の日と定めた「みたま祭」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の一環として斎行致しました。

▼長　月（九月）

二十一日　**観月祭**

＊名月を愛でながら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた伝統的な日本人の「こころ」を、雅楽奏楽のなか秋の夜長を楽しみました。

二十三日　**秋分祭秋季祖霊祭**

＊「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」という秋分の日にちなみ、日毎ご加護をいただいている祖霊慰めの祭儀を斎行致しました。

▼神無月（十月）

十七日　**神嘗奉祝祭**

＊遷御の儀が厳修されたばかりの伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穣に感謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝し当宮におきましても厳粛に斎行されました。

十九日　**秋季例大祭前夜祭**

二十日　**秋季例大祭本殿祭御神幸祭**

＊神社本庁より幣帛が奉られ、一年に一度の大御祭が斎行されました。当宮創祀者の河野通次を偲び、854年伝統の無形民俗文化財指定「サイ上がり神事」も厳かに執り納める事が出来ました。

▼霜　月（十一月）

三日　**明治祭**

＊戦前の明治節にあたり、四大節（紀元節、四方節、天長節、明治節）の一つです。明治天皇様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、ご皇室の更なるご繁栄を祈願致しました。

十五日　**七五三祭**

＊お子様の成長をご祭神へご奉告し、ますますの健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上げました。

二十三日　**新嘗祭**

＊天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇（てんじんちぎ）に勧め、また、自らもこれをお食しあそばされて、その年の収穫を感謝する古来より伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行われます。当宮におきましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫を神恩に感謝申し上げ、厳粛に執り行いました。

▼師　走（十二月）

一日　**大注連縄奉製・煤払式**

＊神域と外界とを隔てる拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを掃き清めました。

二十三日　**天長祭**

＊今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

三十一日　**大祓式**

＊私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに犯してしまった罪穢れを人形（ひとがた）に託して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を営むべく心技体を整えます。

新守札清祓式
除夜祭

菊花懸崖奉納

彦島老町在住
長崎興幹　殿

水墨画奉納

長野県諏訪市在住
澁谷アヤ子　殿

まほろば学級 寄稿感想文

去る平成二十五年八月四日(日)、「まほろば学級」を開催致しました。情操教育の一環として、下関市教育委員会の後援のもと開催致しましてお蔭様をもちまして第八回目を迎える事が叶いました。改めまして趣旨ご賛同賜りました関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。参加児童から寄せられました感想文を掲載させていただきます。彦島地区の小学校を通じて、夏季休暇前にご案内状を配布しております。一日という短い時間ではありますが、氏神さまの境内、鎮守の杜で楽しい時間を過ごしてみませんか。例年、八月第二日曜日に開催しております。

「最後のまほろば学級に参加して」

下関市立江の浦小学校 第六学年　船井　彩佳

八月四日に開催されたまほろば学級にお世話になりました。

五年生から参加して今年で二回目でしたが、夏休みの一番の思い出になるほど楽しく充実していました。三年生から参加すればよかったと思いました。

手水の作法からはじまって、参ぱいの仕方から神社の建物や鳥居、こま犬の意味など分からないことがたくさん知れてためになりました。おみこしを間近で見学できた事は感動しました。

去年神社参ぱい唱歌を練習する時間は、今年はクジラの話でした。彦島にクジラがうちあげられたことや、シロナガスクジラが最大で最高においしいクジラだと初めてしり、貴重なお話でした。そして、クジラカレーがお昼ご飯でたので感動しました。美味しかったです。

自由時間もたくさんの友達ができて、鬼ごっこやかんけりもして楽しかったです。特にメアリーゲームがおもしろかったです。

去年も作ったあんどんは、去年より上手にできてよかったです。日が沈んで、みんなでそろって歩いた参道は雅楽の生演奏もあり緊張しましたが落ち着いた気持ちになれてよかったです。

お母さんたちが夕方から来てくれて一緒にバーベキューを食べました。たくさんのメニューでびっくりしました。ハンバーグや焼きそばはとくにおいしかったです。

来年は中学生になるので参加できないけど、このまほろば学級で学んだことを忘れずに、いい思い出として何かの役に立てていきたいとおもいます。

二年間お世話になりました。ありがとうございました。

職場体験学習寄稿感想文

去る平成二十五年十一月十二日(火)～十三日(水)、下関市立彦島中学校の生徒五名による「職場体験学習」を開催致しました。

勤労観・職業観の育成に地域一帯となり支援する校外学習の一環です。

多種多様な業種がある今日の仕事。社会人になる前の発達段階で、新たな自分を発見する手掛かりを掴むよい契機だと思います。自己の個性や適性を把握し自己理解を深めていく上で、様々な体験・経験を積み重ねることは、極めて重要であります。実際に仕事を経験し、働くことの厳しさや喜びなどを身をもって体験することを通して、コミュニケーション能力、社会的スキルを身に付け、人間関係の大切さを体得していただけたと思います。

参加生徒から寄せられました感想文を掲載させていただきます。

下関市立彦島中学校 第二学年　中嶋　柊

僕はこの二日間で「礼儀を学ぶ」という事を念頭に頑張りました。最初は、何もわからずに戸惑いと不安が頭をよぎっていましたが、八幡宮の方が懇切丁寧に説明して下さったので、その不安が一掃され、新たな発見や驚きに変わっていきました。

今回の体験学習では、「礼儀、作法、人としてあるべき姿」を学ぶことができたと思います。先ずはじめに学んだことは「手水の作法」でした。全ての動作を一杯の水でする事、最後に柄を立てて柄全体を洗い清める事は初めて知りました。

次に、今までできていなかった楼門を通る際に一拝するという事を学びました。

その次に、毎日執り行われている朝拝の作法を学びました。起立したままで「二拝二拍手一拝」の深い礼をするときに、手のひらが足の膝の皿の上になる位置までゆっくりすりおろしていくと、美しい拝の形になること、柏手のときには、両手を合わせた際、第一関節右手を引くということを学びました。また、玉串拝礼の作法も学びました。座って行う坐礼と立ったまま行う立礼とを行い、将来どこの神社で祈願を受けてもできる自信がつきました。でも、祭式という足の運びの決まりなどは難しくて間違えてしまうばかりでした。

その次に清掃がありました。神様の周りを常に清らかにしておくという神職の方々の基本だそうです。境内を一時間かけて清掃しましたが、広範囲だったので時間が足りませんでしたが、清掃、掃き清める大切さ大変さを知りました。

そして、次に守札の袋詰め行いました。修祓という清めの祓いを受けて二千体以上の作業でしたので、すごく疲れましたが終わった時の達成感があり良かったです。

次の日には、神社書道をしました。祓詞という祝詞を書きましたが、いつもと違って漢字ばかりだったので楽しかったです。でも、正座で書いたので足がしびれて大変でした。

質疑応答では、仕事をする中で一番大切なことは？　という質問に、「神様を喜ばす心を持つこと」と言われて、少しわかるような気がしました。

この二日間の職場体験学習は、自分の進路の役に立つ良い経験になりました。

第六十二回 神宮式年遷宮斎行

昨年、日本人の心のふるさと、我国の総氏神様である伊勢の神宮【三重県伊勢市】におきまして、二十年に一度の我国における最大最重要の祭儀が斎行されました。皇大神宮（内宮）で十月二日、豊受大神宮（外宮）で五日に重儀である両御正宮の「遷御（せんぎょ）の儀」が、黒田清子臨時神宮祭主以下百数十名の祭員奉仕のもと、清澄の浄闇の中厳修されました。

総氏神様に対する数多の人々の尊い祈りの継承により今日まで守り伝えられて参りました社殿をはじめ装束・神宝等七一四種一、五七六点を新しくする遷宮祭儀。伝統的精神文化の蘇りが図られ、それがまた未来に向っての浄明な生成発展への新たな始まりとなって繋がり得ました。

この重儀に際し、当宮柴田宮司も参列の栄を賜りましたので、当宮川西禰宜の昨年八月のお白石持ち行事奉献と併せご報告させて頂きます。

『遷御の儀を奉拝して』

宮司　柴田　宜夫

昨年の十月二日、私は、第六十二回神宮式年遷宮の皇大神宮遷御の儀の特別奉拝をさせて頂きました。　この感動は、生涯消えることのない、センス　オブワンダーともいうべきものであります。二つのことを実感させられました。

ひとつは、「神宮は命ある聖地」であるということです。神宮では、「祭り」の本義のひとつである「待つ」ということも「祭り」であります。臨時に設けられた席にて、心静かにその時を待ったのでした。すると、「ムササビ」や「鹿」、さらに「テン」の鳴き声が聞こえたのです。これは、周りの方がおっしゃっていました。大自然の中に御鎮座されている、第十二代垂仁天皇の皇女である倭姫命が、伊勢の地を鎮座の地と定めて以来、二千年、時が止まっているのではないかと思いました。アメリカの建築家、アントニオレイモンドは、「世界で一番古くて新しい」といわれましたが、まさにそのことを強く感じましたね。イスラエルの聖書研究家のアンドレラシュラキは、「世界の聖地のほとんどが廃虚となっているが、神宮だけは生きている。」と言われました。まさしく、二十年に一度、全てのお建物を造り替える営みは、神様の永遠の若返り「常若（とこわか）」で、しかも、この遷御の儀は、その二千年前の創祀（そうし）の再演なのであります。クライマックスともいうべき、遷御の儀の出御（しゅつぎょ）で、目の前を天照大御神が、お通りになる直前に、風がザァと吹きました。「神様がお慶びになっていらっしゃる」と感じ、お通りになっている瞬間には、えにもいわれぬ感覚が全身をかけぬけました。自然と頬に涙が伝うのであります。この御神恩に必ずや報いなければと、その

『お白石持ち行事奉献』

禰宜　川西　裕久

平成二十五年八月二十九～三十日にかけて一泊二日の行程で、山口県神社庁下関支部奉献団として豊受大神宮（外宮）のお白石持ち行事に参加させて頂いた。初日、伊勢に入ると一番に内宮神楽殿において御神楽奉納、大神様の御前近く御垣内にて参拝をさせて頂いた。全国各地から行事に参加される大勢の参拝者に驚き圧倒されながらも、御垣内参拝において、新宮へ遷御なされた後はこの宮殿に参入することはないと思い至り、感慨深く旧殿を拝し仰いだことであった。

次いで夕闇迫る二見興玉神社へ参拝、祓串に通常の紙垂ではなく海中の藻塩草を付けた祓具、無垢塩草にて清めを受け翌日の奉献行事に備えた。我々のお白石奉献は最終日に当り、これに備えて参拝する人の数も多く、期間中は本殿から折り返して帰って来ることが叶わぬ一方通行であったので、本殿参拝は断念し遠所より臨み遥拝とした。それでも折角の折ということで本殿へ参拝に行った人の中には、通常は五分も掛からぬ距離を神社の奥まで行き迂回して来られたものか、薄暗くなってからの到着の方もあった。

明くる三十日は早朝より白石の載せられた車を奉曳。

彦島八幡宮　検索

時を振り返るたびに、思いを新たにしています。

もう一つ実感したことは、二十年という一つの区切りです。なぜ、二十年なのか諸説ありますが、日本文学研究者のドナルドキーンは、「いきいきと文化を伝えるワンジェネレーション」といわれました。遷御の儀を待つ間、これまでの二十年、そして、今、次の二十年に思いをはせました。「祭り」は、心の呼吸だと思っています。心の炭酸ガスを吐き捨てて、神様からお与え頂いた心で神様に向い、そして若返った神様のお力により、活き活きと元気を取り戻すわけです。日々のお祭り、月毎、季節毎のお祭りが、「呼吸」とするならば、一年に一度の例祭は、「深呼吸」、この二十年に一度の遷宮は、「最大の深呼吸」ではないでしょうか。　次の第六十三回の式年遷宮も、二十年に一回のペースを守り続けていく連続性、日本人のパワーをさらに伝えていかなくてはと思います。

神社神道は、「今ここに生かされていることを神様に感謝すること」だと考えます。これまで生かされなかったらこの感動は体験できなかったわけですから。感謝の心をつないでいくことが、神社神道の本質でもあります。御遷宮の翌年は、感謝の誠をささげる年、「おかげ年」といわれます。しかも、出雲大社も六十年に一度の「大遷宮」が行われました。天つ神のトップである神宮と国つ神の代表である出雲大社の遷宮が重なった佳節の翌年、まさに、本年は、「大おおかげ年」であります。あの瞬間に誓った約束を反故（ほご）にしないよう、日々清々しく、新たな気持ちで前向きに「日清日新日進」で御奉仕申し上げます。そして、皆様方のくらしが、「日々是好日」、穏やかで、良い日でありますように心からお祈り申し上げます。

奉献最終日ということで出発式の挨拶は感極まったものであった。時刻、「エイヤ！」の掛け声も高らかに奉曳が開始され、道中の木遣り音頭も賑やかに外宮火除橋前に到着。奉仕者は配られた白布に白石を包み持ち神域へ参進、揃って拝礼後いよいよ御門内への参入。真新しい白木の輝きも美しい御正殿を右手間近に拝見しつつ、御敷地に白石を奉献した。例え臨時の奉仕で神宮祭典に御奉仕出来たとしても浄闇の祭典が多いことでもあり、白昼間近に御殿を仰ぐことはこの奉献行事の機会にしか中々有り得ぬものと思う。非常に貴重な体験であった。炎暑の中の奉献行事ということで、主催者神領民側のご配慮があったものか、一時間程度の短い時間で終わり、今振り返っても一瞬の出来事であったように思われる。

神宮御殿の御用材を神苑まで曳く御木曳行事にも参加することが叶い、またこの度のお白石持ち行事にも参加させて頂き、御神縁と参加をさせて頂いた人々の御縁御配慮に感謝である。次は二十年後、この伝統文化に根付いた神事が間違いなく再び執行され、日本が今より更に素晴らしい国となることを信じつつ、自らもお役に立つよう奮起せねばと思う今日この頃である。

神宮参拝のご案内（伊勢路への参詣）

～新しく蘇りがはかられた御正宮に拝し、日本人の心のふるさとを感じませんか?～

▼内宮（皇大神宮）

御祭神：天照大御神
御神徳：皇室の御祖先の神様で、我が国で最も貴く、国家の最高神とされ日本人の総氏神様として崇められています。

▼外宮（豊受大神宮）

御祭神：豊受大御神
御神徳：「受＝うけ」とは食物のことで、食物・穀物を司り衣食住をはじめすべての産業の守り神様として崇められています。

▼公共交通機関（アクセス）

日本各地から伊勢神宮へのアクセスを考えた場合、名古屋もしくは大阪を目指し、そこからＪＲまたは近鉄線を利用する経路が便利です。伊勢市内へ到着後の交通手段はタクシー・路線バス・レンタカー・徒歩と様々ですので、滞在時間を考慮しながら移動される事をおすすめ致します。

■電車利用の場合

近鉄特急　大阪・上本町駅 ----->宇治山田駅　1時間50分
近鉄特急　名古屋駅 ----->宇治山田駅　1時間30分
近鉄特急　京都駅 ----->宇治山田駅　2時間10分
ＪＲ快速　名古屋駅 ------>伊勢市駅　1時間37分

■駅からの移動

内　宮　＜近鉄＞宇治山田駅からバス15分
外　宮　＜JR・近鉄＞伊勢市駅から徒歩5分（600m）

■お車利用の場合

内　宮　＜伊勢自動車道＞伊勢インターまたは伊勢西インターより5分
外　宮　＜伊勢自動車道＞伊勢西インターより5分

［写真提供：神宮司廳］

平成26年　年頭のご挨拶

下関市長　中尾友昭

新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、平成26年の新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて昨年を振り返りますと、アベノミクス効果による景気回復基調への転換、２０２０年の東京五輪の開催決定、富士山の世界遺産登録など、各方面で明るい兆しや話題がございました。

本市でも、昨年４月に下関商業高等学校新講堂の竣工とみのりの丘ジビエセンターの供用が開始、８月には「地域内分権の推進方向」の策定、10月には新消防庁舎と消防防災学習館「火消鯨（ひけしくじら）」の運用開始に加え、県道新下関停車場稗田線が開通するなど、市民生活に直結した諸施策を着実に進めてまいりました。

また、イルミネーション水族館やふくちょうちんまつりなど夜景観光の推進を充実させるとともに、全国の中核市が一堂に会する「中核市サミット２０１３ in 下関」を開催し、交流人口１０００万人・宿泊客１００万人の実現に向けて積極的に取り組みました。中でも、あるかぽーと地区では４月に芝生エリア、７月に世界有数のコーヒーチェーン店、そして９月には観覧車を中心としたアミューズメント施設「はい！からっと横丁」が次々にオープンし、海峡のにぎわいが加速いたしました。

さて本年は、中心市街地活性化の主要事業である「下関駅にぎわいプロジェクト」において、ＪＲ下関駅ビルと東西連絡通路が３月にオープンするほか、夏にはシネマコンプレックスと南口交通広場が完成するなど、下関駅が新たな下関の玄関口として生まれ変わります。ＪＲ下関駅ビルの３階には、下関市次世代育成拠点施設「ふくふくこども館」もオープンし、子どもの健全な育成と子育て家庭の支援に加え、“集い、交流する場”として新たなにぎわいの創出が期待されます。

観光の振興では既存施策の拡充のほか、２０１７年の高杉晋作没後150周年に向けた企画として、新たに「維新体感　萩・下関スタンプラリー」を開催するほか、「家族旅」「シニア旅」などさまざまな切り口から交流人口の増加を目指してまいります。

また、友好都市締結35周年を迎える中国青島市と記念行事を行うとともに、青島世界園芸博覧会に下関展示園を出展するほか、沖合人工島「長州出島」に就航する初の定期航路となる、韓国済州と本市を結ぶ国際フェリー航路の実現に向けて取り組んでまいります。

本格的な人口減少社会を迎え、社会経済や地域社会の状況は大きく変容しています。市民の皆様の暮らしを支える行政サービスの重要性は益々高まっており、その主体である地方自治体のあり方そのものが問われています。

そのため、新たなまちづくりの方針を明確にする次期総合計画の策定においては、皆様の想いをしっかりと把握し、50年、100年先を見据えたまちづくりに向け全力を傾注し取り組んでまいりますので、今後とも、本市市政への皆様の温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様にとって良き年となりますよう心からお祈り申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。

祭事暦（平成二十六年上半期）

皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参拝下さい。

月次祭

毎月1日・15日

※本殿前にて皆様方に終日「御神供米」をおわかち致しております。

朝粥会

毎月21日 午前6時30分

※誕生月の方全員に玉串拝礼をしていただきます。四季折々のお粥をご賞味下さい。

睦月（一月）

一日　初太鼓　歳旦祭

三日　元始祭

天皇陛下御親ら宮中三殿【賢所、皇霊殿、神殿】において皇位の始源を祝し親祭あそばされます。当宮においても皇位を祝寿する祭祀が執行されます。

十二日どんど焼き

＊注意＝正月飾は当日正午以降は受付致しかねます。ご持参されても お受けできませんので予めご了承下さい。

十五日　成人祭

如月（二月）

三日　節分祭追儺式

□開運福引大会

□豆まき（①18時30分②19時30分）

□豆まきは、年男女（年年廻り年）・厄年・年祝いに該当するご参拝の皆様方にも本殿にて厄除祈願祭斎行後、第二回目の豆まきをご奉仕していただけます。

〈初穂料五千円〉

十一日　紀元祭建国奉祝祭

我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げます。

十七日　祈年祭

「としごいのまつり」本年の五穀豊穣と皇室・国家の弥栄をご祈念申し上げます。

弥生（三月）

二十日　春季祖霊祭

家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。

「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という“春分の日”を迎えるにあたり、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致します。

卯月（四月）

一日　勧学祭

この春めでたく入学される新一年生の皆様の学業成就・交通安全・無病息災を祈願する新入学奉告祭を執り行います

二十九日　昭和祭

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念致します

皐月（五月）

水無月（六月）

三十日　大祓式

彦島八幡宮　検索

氏子奉賛会便り

「大注連縄の由来と彦島八幡宮の大注連縄について」

彦島八幡宮奉賛会　行事委員長　和田　博

その昔、天照大御神が須佐之男命の乱暴を畏れ天の岩戸にお隠れになられた時、天照大御神を二度と天の岩戸に入れないようにと、張り巡らしたが尻久米縄が起源とされています。

古くから、神域を画するために清浄な「しめなわ」が用いられました。又、神社では鳥居や出入口の四方に縄を張って、神域と下界を区別していました。しめなわは不浄を祓う為に、神前や神事の場などにも使用されます。縄は左縒りとされています。

「しめなわ」を注連縄と書き、大きなしめなわは大注連縄と書きます。彦島八幡宮においては、十二月に本殿（社殿）や境内に鎮座するご祭神と縁故の深い神を祀るとよばれる若宮神社、大歳神社、水神社をはじめ社務所、祖霊殿等の注連縄を毎年新しく奉製して取替えを行っております。

全国の神社で、氏子の奉仕団体や青年会が集い、自分たちの手で毎年新しい注連縄を奉製して取替えを行う神社は殆どありません。彦島八幡宮においては、それほど奉賛者の熱意がこもっています。

それでは彦島八幡宮の注連縄の奉製プロセスについて紹介致しましょう。

先ず大注連縄、中注連縄、小注連縄の三種類の注連縄を奉製します。大注連縄は拝殿前に、中注連縄は社務所・祖霊殿、小注連縄は前述した摂社にそれぞれ取り付け奉納致します。

奉製に当たっては、先ず九月二十日頃、彦島八幡宮奉賛会行事委員の方々にて奉製に使用する藁を寄贈していただく下関市内日の神道家農家へ伺い、トラックで採りに行き、田んぼに干してある稲穂の藁をトラックに積み込み持ち帰り、神社の倉庫内へ置き、乾燥保管し、十二月初旬に倉庫から出し、この藁を使用して、約三十人がかりで大注連縄を作り上げます。

最初に二本ずつ、三本の縄を作り、この三本の縄を、左縒りに縒って組み合わせ、この縄にぼんぼり三つ取りつけ、間に紙垂をたらします。最後に左右のバランスを見ながら拝殿前に最終取り付け奉納して完成となります。特に拝殿に取り付ける大注連縄は、最新の注意を払って取り付け、本殿にて奉納奉告祭を執り行い新年を迎える事になります。

この注連縄に使用するは、ねばり強い糯米の藁だけを使用していましたが、最近では少なくなり、現在では粳米の「こしひかり」の銘柄の藁も使用しています。

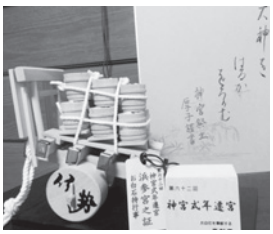
結びになりますが、彦島八幡宮は彦島の全ての町民に生涯安泰で、常に皆様の弥栄長久を見守って下さる八幡宮であります。

氏子青年会便り

平成二十五年下半期の氏子青年会「維蘇志会」の境外活動を報告致します。

▼去る八月十日（土）に全国氏子青年協議会創立五十周年記念　第五十一回定期総会並びに定期大会（テーマ＝つなげよう　常若の地　伊勢の地で）が三重県伊勢市の皇學館大学におきまして開催されました。開催に先立ち、浜参宮を兼ねた二見興玉神社に正式参拝を致しました。

翌日は特別神領民として石﨑会長以下会員がお白石奉曳車奉曳と内宮御正宮の御敷地にお白石を奉献する一役を担いました。



▼去る十一月二日（土）に亀山八幡宮亀笑会創立五十周年記念式典が亀山八幡宮におきまして開催され、当宮柴田宮司と共に石﨑会長がご招待の栄を受け出席致しました。昭和三十八年結成以来、半世紀内外にわたり斯界はもとより、地域活性化へ多大な貢献をされました全国屈指の氏子青年会であります。

敬神婦人会便り

去る十一月十六日（土）に当宮敬神婦人会柴田智江会長以下総勢三十四名にて会員の親睦と研鑽を踏まえ、日帰りの研修旅行を執行致しました。

明治維新胎動の地である萩市に鎮座する松陰神社へ正式参拝し、国の史跡に指定されている松下村塾はじめ宝物殿至誠館等々境内を見学致しました。

八幡様の知恵袋　その二十八

神様とおはたらき

▼天津神（あまつかみ）と国津神（くにつかみ）

天津神（天神）は、天上界に由来する神々をはじめ高天原から降臨された神様の総称。

瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）を代表に、子孫である天皇家とは大変深い関わりがあります。記紀に記載される大和朝廷の確立に尽力された天孫系の神様等も天津神です。

国津神（地祇）は、地上に由来する神様の総称。天津神の要請に応じて地上の統治権をお譲りになられた大国主（オオクニヌシ）を代表に、所謂「国譲り」に応じた先住の神様等が国津神です。

▼自然神と人物神

神様は、霊妙不可思議な印象を与える存在、優れた徳があり畏き存在として崇敬されます。

祭祀の起源は、天地自然のはたらきを司る神様等と考えられています。山、海、川の神々の他に、農耕民族である日本人は天照大御神に代表される太陽神を重要視し、風を司る志那都比古神（シナツヒコノカミ）や雷を司る建御雷之男（タケミカズチノカミ）も自然神とされています。

人物神は、「怨霊」や「功績を顕彰された」人物です。前者は奈良・平安時代にかけ起こった天災疫病の原因とされ恐れられた、非業の死を遂げた早良親王をはじめ崇徳上皇、菅原道真、平将門があげられます。後者は、中世以降に功績が称えられた武将や軍人である徳川家康、楠木正成等の優れた徳に肖った神様です。

▼氏神様（うじがみさま）と産土神（うぶすながみ）

一般的には、現住所の氏子区域に該当する神様を氏神様、出生した土地の神様を産土神と大別します。

ただし、本来の氏神は、文字通り一族、氏族の祖先神であり、特定の氏族が守護神として崇めた神様を起源としています。例えば、古代中臣氏は天児屋根命、忌部氏は天太玉命を祀り、また、中臣氏と関係の深かった武甕槌命（鹿島神宮）と経津主命（香取神宮）を、藤原氏が春日大社に祀るなど特殊な例もありました。

中世以降の例としては、源氏の八幡神（八幡宮）、平氏の厳島明神（厳島神社）などが挙げられます。別格として皇室の祖神を祭った伊勢の神宮は、近世までは皇室のみの氏神でありましたが、今日では日本人の総氏神とされています。

中世以降は氏神の周辺に住み、その祭礼に参加する者全体を「氏子」と称するようになり、氏神は鎮守や産土神と区別されなくなりました。同じ氏神を祭る人々を「氏子中」、「氏子同」といい、その代表者である氏子総代を中心に神事や祭事が担われ奉仕されてまいりました。氏神を祀る神社の周辺には住んでいない場合、その神を信仰する者を「崇敬者」といい、氏子と併せて「氏子崇敬者」と総称しています。

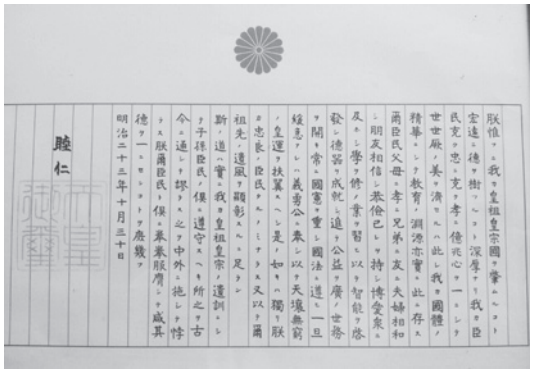
▼荒魂（あらみたま）と和魂（にぎみたま）

荒魂とは神様がもつ荒ぶる側面と怒りの側面のおはたらきを総称していいます。天変地異や疫病の流行を荒魂と考え、鎮める為の供物を捧げる儀式や臨時祭祀を執行してきました。

和魂とは、優しく平和的な側面を総称しています。雨を齎し、太陽の恵みを与え、作物の生育を助けるはたらきは、正に和魂を象徴しています。さらに、和魂は幸運によって人々に恵みを与える「幸魂（さきみたま）」と、奇跡をもって人々に恵みを及ぼす「奇魂（くしみたま）」の二つに分類される解釈もあります。

今こそ教育勅語を!!～十二の徳目の実践～

【原文】



明治天皇様が時の山縣有朋内閣総理大臣と芳川顕正文部大臣に対し、教育に関してお与えあそばされた勅語の事を、正式には「**教育ニ関スル勅語**」と言います。明治二十三年十月三十日に発布され、渙発二四年余り経過致しましたが、時代は変遷しても教育の根幹は不変であります。最近、道徳教育の在り方について議論の最中ではありますが、この実践こそ疲弊した教育現場に必要と考え口語訳と**十二の徳目**を掲載致しました。

極端な個人主義が横溢している現況を打開するには、祖先から受け継いできた豊かな感性と美徳を取り戻す事が必須であります。教育勅語の精神を再認識し、「道義の国 日本」再生のために、精進努力致しましょう。

【口語文】　＊注　『国民道徳協会訳文』参照

私は、私達の祖先が、遠大な理想のもとに、道義国家の実現をめざして、日本の国をおはじめになったものと信じます。そして、国民は忠孝両全の道を全うして、全国民が心を合わせて努力した結果、今日に至るまで、見事な成果をあげて参りましたことは、もとより日本のすぐれた国柄の賜物といわねばなりませんが、私は教育の根本もまた、道義立国の達成にあると信じます。

国民の皆さんは、子は親に孝養を尽くし、兄弟・姉妹は互いに力を合わせて助け合い、夫婦は仲睦まじく解け合い、友人は胸襟を開いて信じ合い、そして自分の言動を慎み、全ての人々に愛の手を差し伸べ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格を磨き、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また、法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態の発生の場合は、真心を捧げて、国の平和と安全に奉仕しなければなりません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然の努めであるばかりでなく、また、私達の祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的美風を、さらにいっそう明らかにすることでもあります。

このような国民の歩むべき道は、祖先の教訓として、私達子孫の守らなければならないところであると共に、この教えは、昔も今も変わらぬ正しい道であり、また日本ばかりでなく、外国で行っても、間違いのない道であります。から、私もまた国民の皆さんと共に、祖父の教えを胸に抱いて、立派な日本人となるように、心から念願するものであります。

①父母ニ孝ニ（親に孝養を尽くしましょう）
②兄弟ニ友ニ（兄弟・姉妹は仲良くしましょう）
③夫婦相和シ（夫婦は互いに分を守り仲睦まじくしましょう）
④朋友相信シ（友だちはお互いに信じ合いましょう）
⑤恭倹己レヲ持シ（自分の言動を慎みましょう）
⑥博愛衆ニ及ホシ（広く全ての人に慈愛の手を差し伸べましょう）
⑦學ヲ修メ業ヲ習ヒ（勉学に励み職業を身につけましょう）
⑧以テ智能ヲ啓發シ（知識を養い才能を伸ばしましょう）
⑨德器ヲ成就シ（人格の向上につとめましょう）
⑩進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ（広く世の人々や社会のためになる仕事に励みましょう）
⑪常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ（法律や規則を守り社会の秩序に従いましょう）
⑫一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ（国に危機があったなら正しい勇気をもって国のため真心を尽くしましょう）

彦島八幡宮　検索

海上自衛隊とのご神縁

去る十一月八日（金）、海上自衛隊給油艦『はまな』に乗船、甲板にて航海安全乗組員安全祈願祭を柴田宮司が斎主として仕え奉りました。

我が国最初の給油専用艦）艦名は静岡県の浜名湖に由来するとの事、三菱重工業(株)下関造船所（彦島江の浦町）に停泊されての祭典でした。法の整備が未だに不十分、且つ又内憂外患の情勢のさなか、国家安全の大役を担う防人として更なるご活躍とご安全をお祈り申し上げました。我が国周辺の警戒監視活動や災害派遣活動などを通じ、我が国の安全保障や防衛に対する理解を深めていかなければなりません。

当宮では、その他にも護衛艦、ミサイル艇、掃海艇、敷設艦等々の御神縁を賜り、多くの自衛官の皆様方が下関寄港の折に御参拝になられます。

「写真提供：海上自衛隊」

彦島十二苗祖墳墓

＊下関市彦島迫町四丁目四－一二付近

当宮創祀者である河野通次は人皇第五十一代平城天皇の子孫、三位中将大江正房の摘子で伊豫水軍の祖・越智高縄城主河野通清の末裔で伊豫勝山城主でありました。人皇第七十七代後白河天皇御代保元元年（一一五六）保元の乱に藤原頼長と共に崇徳上皇と結び天皇方と戦った結果、白河殿の夜襲に惨敗した通次は残党の園田一覚、二見右京、小川甚六、片山藤蔵、柴崎甚平と率いて西奔比の彦島に逃避して隠棲農夫漁夫を装い再起を謀って居りましたが朝に興り夕に亡びる武士の生活に無常を感じつつ、農耕漁釣に浮世を捨てたと語り継がれております。

それから二十有余年後、植田治郎、岡野将監、百合野民部、和田義信、登根金吾、富田刑部が来島して住むようになり彦島開拓の祖となりました。これを「彦島十二苗祖」と云っております。

今もなお彦島の開拓者等が響灘を望む小高い丘に眠る、言わば「彦島の原点」というべき地である墳墓に是非ご参拝になられてみてはいかがでしょうか。

神前結婚式のご案内

鎮守の杜で 美しく雅やかな結婚式を…

神前にて共に生きることを誓う、人生における最も重要な儀礼を、神聖な社殿で執行してみませんか。

神道における最上の「産霊(むすひ)」行為を実践し、日本の伝統『和の心』を継承致しましょう。

一〇〇名様対応の披露宴会場もあり、隣接の神社会館『瑞鳳殿』にて挙行できます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい。

お食事・仕出し（御弁当）はお任せ下さい

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内

お友達やご家族との会食、披露宴、新年会、忘年会、歓送迎会、各種懇親会、年祭・法要等全てに対応しております。仕出し等の各種弁当もご用意できます。ご予算献立等詳細はご連絡下さい。**完全予約制**ですので予めご了承下さい。ふぐ、くじら、あんこう等々下関ならではの幸を使用した会席も、ご好評頂いております。

（予約センター連絡先）

TEL〇八三―二三四―〇七三二【午前十時三十分～】

お気軽にご相談下さい。

＊洋ホール二～一〇〇名様まで対応

＊和室十二畳（※六畳二部屋）

＊和室二十畳（※十畳二部屋）

【和室会席の場合＝定員三十五名】

平成26年（甲午）　厄年・年祝表

（年祝）

上寿祝	大正 4年生（100歳）	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正 5年生（99歳）	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	大正14年生（90歳）	卒は略字で卆と書き九十と読む。
米寿祝	昭和 2年生（88歳）	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和10年生（80歳）	傘は略字で 八十 と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和13年生（77歳）	喜は草書で 七七 と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和20年生（70歳）	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和29年生（61歳）	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

（厄年）

性別	年齢	前厄	本厄	後厄
男	25歳	平成 2年生（24歳）	平成 3年生（25歳）	昭和64・平成元年生（26歳）
	42歳	昭和49年生（41歳）	昭和48年生（42歳）	昭和47年生（43歳）
	61歳	昭和30年生（60歳）	昭和29年生（61歳）	昭和28年生（62歳）
女	19歳	平成 9年生（18歳）	平成 8年生（19歳）	平成 7年生（20歳）
	33歳	昭和58年生（32歳）	昭和57年生（33歳）	昭和56年生（34歳）
	37歳	昭和54年生（36歳）	昭和53年生（37歳）	昭和52年生（38歳）

（八方塞がり）

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星（方位）に囲まれた状態である八方塞がりです。不安定な年とされ、より注意をしなくてはならいない年です。

本年は**四緑木星**の方が該当致します。（＊以下に表記）

大正４年、大正１３年
昭和８年、昭和１７年、昭和２６年、昭和３５年、昭和４４年、昭和５３年、昭和６２年
平成８年、平成１７年

（七五三祝）

髪置 祝	平成24年生の男女（3歳）	髪を伸ばし整え始めること。
袴着 祝	平成22年生の男子（5歳）	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解 祝	平成20年生の女子（7歳）	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭（お祓い）は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。
これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。

腹帯をお清めされ、安産祈願祭を斎行されますことをご案内申し上げます。

各自腹帯もしくはガードルをご持参下さい。当宮の安産守護の御朱印を押印させていただきます。

古来より戌（犬）はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習が伝承されております。懐妊五ヵ月が過ぎた最初の戌の日を選ぶ地方が全国的に多く見受けられます。

1月
3日(金)友引
15日(水)友引
27日(月)友引

2月
8日(土)先負
20日(木)先負

3月
4日(火)大安
16日(日)大安
28日(金)大安

4月
9日(水)赤口
21日(月)赤口

5月
3日(土)友引
15日(木)友引
27日(火)友引

6月
8日(日)先負
20日(金)先負

重要なお知らせ（※注意事項）

一、正月飾りは一月十一日(土)迄ご持参下さい。
※どんど焼きは一月十二日(日)午前中執行致します。
十二日(日)正午以降正月飾りは一切受付致しませんので、予めご了承下さい。
一、正月飾りのみかん、ダイダイ、鏡餅は持参しないで下さい。
一、神社のお札、お守・破魔矢、縁起物のみ年間通し受付致します。
正月期間は指定の古札納所へ納めて下さい。
古札納所解体後は、社務所までご持参下さい。
※ビニール袋はお持ち帰り下さい。
一、神社とは関係ない物の持ち込みはお断り致します。
※結納品、人形、仏壇仏具、民芸品等は一切お断りします。

＊二十四時間、防犯カメラが作動しておりますので、持参禁止該当物を無断投棄されますと確認次第お持ち帰り頂きますのでご留意下さい。

国宝大神社展 ～国宝大神社展への誘い～

全国の神社から集めた国宝、重要文化財等神道美術の名品や宝物が公開されます。「神宮式年遷宮」斎行の佳節を機に、神社本庁などの協力を得て企画されました。機会がございましたら是非ご拝観下さい。

会期：平成26年1月15日(水)～3月9日(日)
会場：九州国立博物館　3階　特別展示室
〒818-0118　福岡県太宰府市石坂4-7-2
九州国立博物館ウェブサイト
http://www.kyuhaku.jp/
会館時間：午前9時30分～午後5時
【入館は午後4時30分まで】
月曜日休館日

発行所　彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL ○八三―二六六―○七○○
FAX ○八三―二六六―五九一一
ホームページ http://www.hikoshima-guu.net
発行者　柴田宜夫
編集者　山本光徳
平成二十六年一月一日
印刷・㈱ナカハラプリンテックス

彦島八幡宮　検索